

氏名(本籍)	周 愛 光 (中 国)
学位の種類	博 士 (体育科学)
学位記番号	博 甲 第 1,292 号
学位授与年月日	平 成 6 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
審査研究科	体 育 学 科 研 究 科
学位論文題目	スポーツにおける疎外に関する哲学的研究
主 査	筑波大学教授 教育学博士 片 岡 暁 夫
副 査	筑波大学教授 教育学博士 成 田 十 次 郎
副 査	筑波大学助教授 新 井 保 幸
副 査	筑波大学助教授 岡 部 克 己

論 文 の 要 旨

本論文は、序章、本論 3 章、結章、および資料からなり、437ページ(1ページあたり800字で、400字原稿用紙約874枚に相当する)より構成されている。

本論文は、従来のスポーツ疎外論を批判的に検討し、哲学的な立場からスポーツにおける疎外問題を解明することにより、新たなスポーツ疎外論構築を目的とした体育学的研究である。

「序章」では、まず、問題の所在が明らかにされる。まず日本および欧米のスポーツに関する様々な議論を整理し、6種に大別している。第一は人間疎外がスポーツ文化に内在しているとする立場、第二は資本主義制度に人間疎外の原因があるとする立場、第三はマルクスの労働疎外論はスポーツ実践に適用できないとする立場、第四はスポーツが人間疎外の解毒剤になるとする立場、第五はスポーツにおける負傷に疎外を認める立場、そして第六は疎外概念を哲学的範疇として用いる立場である。これらの立場がそれぞれ批判され、1. 疎外概念の把握の不十分さ、2. 認識対象としてのスポーツ概念の混乱、3. 人間疎外の原因についての研究が不十分であること、以上三つの問題点が指摘された。

次に研究の方法が述べられる。上記の下位問題を研究するために、以下の手順がとられる。まず、疎外概念を哲学的に検討し、その結果を総括することによって、研究の方法概念としての「疎外」を明らかにした。次にスポーツの概念分析へと展開した。そして両者を踏まえて、スポーツ疎外の分析を行い、最後にスポーツにおける人間疎外の原因およびその克服に関する考察を行っている。

「疎外概念の哲学的検討および疎外概念の方法化」は序章および資料において検討されている。全体は4部分から構成されている。第1部分ではマルクス以前の疎外論が考察された。すなわち、フィ

ヒテ、ヘーゲル、フォイエルバッハの疎外概念である。第2部分ではマルクスの疎外論が検討された。とくにマルクスの労働疎外論が彼の一般疎外論の中に位置付けられるべきであることが指摘された。第3部分ではマルクス以後の疎外論が考察された。すなわち、ルカーチ、マルクーゼ、シャフの疎外論である。第4部分では疎外概念に関する上記のまとめが行われ、著者の一般疎外概念が提示され、そこから下位の文化的疎外および社会的疎外の概念が導かれ、研究上の方法概念として設計された。

[本論]

第1章「スポーツ文化における疎外」は3節から構成されている。第1節では文化人類学および文化哲学における文化概念が考察された。前者が文化を実体概念として扱うのに対し、後者が関係概念として扱うという差異を明確にした。そして後者の立場が選ばれ、「文化とは人間完成を目指すところの主観と客観との疎外過程である」という命題が導かれた。第2節では、スポーツ文化の概念に展開し、「スポーツ文化とは人間完成を目指すところのスポーツ実践者とスポーツ文化財との疎外過程である」という命題を導いた。第3節ではスポーツ文化の疎外的本質と疎外現象について考察され、積極的疎外現象と消極的疎外現象の存在が明らかにされ、後者は人間疎外現象と区別された。

第2章「スポーツ社会における疎外」は3節から構成されている。第1節では、まず、デュルケム、ジンメル、ヴェーバー、マルクスについて、社会概念が検討され「関係性、意識性、行為性」という共通性が抽出され、「社会とは意識に基づいた人間の行為的諸関係である」という命題が提示された。次いで社会的疎外の本質が明らかにされた。第2節では、スポーツ社会の概念を明確にした上で、そこにおける積極的な社会的疎外現象と消極的な社会的疎外現象の概念が指摘された。第3節ではスポーツ社会における疎外現象が考察され、積極的な疎外現象としては「人格理想化」、「技術的理想化」、「理想的チームワーク」、「人間性回復」が、消極的な疎外現象としては「政治利用」、「社会的期待」、「薬物使用」、「金銭」、「暴力」などが指摘されるとともに、「無自覚な疎外」現象があることについても論じた。

第3章「スポーツにおける人間疎外の原因及びその克服」は三節から構成されている。第1節では、スポーツ競争と人間疎外の問題が検討された。ジンメルの競争概念が援用され、競争概念を「間接性・非暴力性」、「正当性・公平性」、「社会的功利性」を本質とする闘争として定義し、文化的側面においても社会的側面においてもスポーツにおける競争が人間疎外の原因ではありえないことを論証している。第2節では、マルクスの価値論が援用され、スポーツ文化とスポーツ商品との区別がなされる。第3節では、ルカーチの商品の物象化説、中岡の現代技術説、パッペンハイムの社会構造説、マルクスの私有と分業説の検討からスポーツにおける人間疎外の克服が論じられ、結論として、社会的分業と商品経済が人間疎外の主要な原因であるとされる。そしてスポーツにおける商品化および手段化の絶対的克服の不可能性を指摘し、絶えざる努力による相対的克服の重要性を明示する。

結章においては結論と残された課題が述べられる。結論の第一は、哲学の概念としての疎外概念は人間疎外概念と同じではないこと、第二は、スポーツ文化には人間疎外現象が存在していないこと、第三は、社会的疎外現象としての疎外は必ずしも人間疎外ではないこと、第四は、スポーツ文化における競争が人間疎外の原因であるという命題は正しくないこと、第五は、スポーツ文化の商品化手段化

が人間疎外の直接的かつ主要な原因であり、分業と商品経済が間接的かつ基本的な原因であること、以上である。そして、以上の理論的認識に基づき、スポーツの人間疎外現象の実践的相対的克服に努力することが課題となると結論されている。

審 査 の 要 旨

スポーツが世界的な現象として巨額の経済価値をもち、また有力な政治宣伝の媒体となってきたのにもない、種々の問題を生じるようになったことは周知のとおりである。これらの問題に取り組む視点として従来から疎外に関する議論があったが、本格的に取り組まれた研究はなかった。このような状況において著者の研究は、スポーツ哲学の立場から基本文献を精査し、論理を組み立てて、スポーツにおける疎外についての認識を深めかつ体系化の道を開いた。

研究課題の解明にあたり、著者のとった哲学的手法は、堅実である。スポーツと疎外に関する基礎的な文献を広くかつ系統的に読解し、それを組み直し、新しい視点を導いている。このことが、先行研究の検討のなかで、視点を失うことなく著者によって遂行されたことは、本論文の価値であり、体育の指導者にとっても価値が高い。また先行研究の批判は適切である。論文の記述は論理的であり、かつ体系的であり、概ね妥当であるといえよう。しかし、本研究は疎外の基本的な論理に限定されており、まだ人間疎外克服の方法論にまで展開されていない。基礎的な段階を超えて、さらに現実のスポーツにおける人間疎外克服の論理へと展開することが今後の課題であろう。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。